

氷風のクルツカ

雪の妖精と白い死神

柳内たくみ

illustration: 有坂あこ



この物語はフィクションです。

実際に起きた出来事や実在した人物をモチーフとしていますが、歴史的事実とは異なっています。

† 白魔の戦場

その大地は、「白」バルコイネンによって覆い尽くされていた。

湿原が、沼が、道路の全てが雪に覆われ、丘や平原は荒天にうねる白い海原が一瞬にして凍り付いたような姿となっている。

冬の女王はその伴侣を迎えるために、氷と雪とでその身を飾る。樹氷の森は彼女の神殿、不用意に踏み込む者を死の彷徨へと誘う白魔の迷宮だ。静寂を好む冬の女王は、騒がしい不埒者を許さない。極寒の息吹で行く手を阻み、この大地を押し通ろうとする者の気力と体力、そして命の炎までをも吹き消そうとする。

処女雪の表面に残されるのは東から西へと向かう足跡のみ。何を求めて進んだのか、彼らの足跡は西に進むほどにその数を減らし、やがて途絶える。どこにも行き着けなかつた彼らは、柔らかな雪の下で永遠に眠ることとなるのだ。

短い昼が終わり、やがて長い夜が訪れる。
分厚い雲に覆われた空には星も、月もない。白かつた世界の全てが夜の帳とぼりに覆われ、暗黒色によつ

て塗りつぶされる。すると動物達は息を潜める。暗黒の魔王と冬の女王の逢瀬を邪魔することのないよう。その恐怖をやり過ごそうとするかのように。

だが、そんな中で閃光が瞬いた。コツラーの森は、冬の女王も暗黒の魔王も恐れない兵士達の戦場であつた。銃口から放たれるマズルフラッシュが、闇を一瞬だけ引き裂き、周囲が白魔の森であることを見出させる。

瞬く白、瞬く黒とが激しく入れ替わる。銃声が雷鳴の如く響き渡る。

「くつ！
弾が」

クルツカ・サムライネンは素早くネジを緩めると、モシン・ナガンM一八九一／三〇から照準眼鏡を取り除いて櫛桿を引き、五発の弾丸を束ねた挿弾子を押し当てて装弾する。

すぐさま片膝をついて据銃し、照星と照門と、そして白い雪中用偽装服で身を固めた敵とを重ね合わそうとする。

だが、激しく動搖する身体、爆発しそうな心臓、そして恐怖に震える腕がなかなかそれを許してくれない。逃げる敵を銃口で追いかける。

はやくはやくはやく！ 照準よ合つて。

秒にしてコンマ以下の時の流れが、生死を分ける。

ああっ、もうっ！

闇の中にうつすらと浮かぶ彼女の敵は、木の幹の向こう側に姿を消した。わずかに遅れて放つた

クルツカの弾丸は、木の幹にすら当たらない。これがシモ・ヘイへだつたら、と彼女は思う。彼らばこんな敵はいとも容易く片付けているに違いない。だが彼女はヘイへではなかつた。

「ひつ！」

空気を切り裂く弾丸がクルツカの耳元を掠めた。今度はクルツカが雪を蹴つて逃げる番である。重い足を賢明に動かしてジグザグに走り、立木の陰へと飛び込む。

「きやはははは！ 見てよかーさん、こいつド素人だよ！」

瞬く閃光に浮かぶ敵の影は二つあつた。

一人は戦闘の高揚感に笑い、叫び、逃げるクルツカを脅かすように囁き立てる。

一人は冷静で沈着だ。獲物の気配に耳をそばだて、確実にゆっくりと追い詰めようとしてくる。「ちょっと腕が立つからって、『雪の妖精』なんて名を貰つて調子に乗つちゃつてさあ、おしおきが必要だと思わない？」

「照明弾を使うよ、ミーシャ！ 準備おし」

もう一人も同じ銃を構えながらも、落ち着いた口調で夜空に小さな筒先を向けた。

「はいな。かーさん」

灯火が打ち上げられる。青白い閃光が広がり、白魔の森は輝ける白い雪とその影が作る漆黒のコントラストで埋め尽くされた。樹氷の作る影が、風に煽られる小麦のように一斉になびいていく。

光源が、ゆっくりとその位置を下げる。だが全ての影が同じ方向へと傾いていく中で、一つだけ異なる方向に動いていく影があった。

「みくつけた！」

「まずっ！」

クルツカの肌が総毛立つ。照明弾の輝きを全身に浴びていたのだ。慌てて身体を雪の中に投じる。クルツカを掠めた銃弾が木の幹を抉る。ただ抉るばかりでなく、炸裂して大鋸屑おがくずをまき散らしながら、樹木をねじくるような音とともに引き倒した。

逃げ惑う動物のようにクルツカはその陰から這い出して森の向こうへと飛び退いた。

「どつちに逃げたー!?」

「そつちだよ。そつちの奥の方さね！」

やがて照明弾が雪原に落着する。周囲の雪をその熱で溶かし、雪面の下へと潜り込んでいく。クルツカは夜の帳に隠れるように、その裾の下へ飛び込んだ。

「自分から『雪の妖精』だなんて名乗ったわけじゃないのに！」

「なんでお仕置きされなきやなんないのよ、と苦情を呟く。

「こいつら頭おかしいんじゃない？」

特にミーシャとか言う若い方は、常軌を逸した凶暴性を少しも隠そそうとしない。そのためか動き

が少しも読めないのだ。クルツカの恐怖を煽るためにわざとそうしているのなら相当の策士である。実際、クルツカは恐怖に捕らわれ、逃げるのに精一杯となっているのだから。

樹木にしがみつくように隠れ、息が整うと雪を蹴って、藻搔くように走る。だがそんな繰り返しの中で二人組の敵は、獲物を追い立てる獵師のように確実に距離を詰めて来ていた。

あいつら並の腕じゃない！

こんな敵に挑もうとした自分が、馬鹿だつたのかも知れない。自分は圧倒的に力が足りない。弱い。弱過ぎるのだ。だが、いくら後悔を積み上げても許してもらえるはずはない。これまでに多くの敵を殺してきたし、なにしろこれは戦争なのだ。

照明弾の残照が尽きて森は再び闇に閉ざされる。途端に周りに何があるか見えなくなつた。そこに付け入るような銃弾が飛んできて、遮蔽物についていた木の幹が弾ける。

「あつっ！」

破片がクルツカの身体を掠め、肌に食い込む。クルツカは手探りで這うようにして森を無様に逃げ惑う。

見栄も外聞も、全てをかなぐり捨てて、一メートルでも、一センチでも敵から遠ざかるよう、這いつくばつた。

「当たつたかな？　どう思う？　かーさん

「無事でいてくれた方がウチとしちゃ嬉しいね。簡単にくたばられちゃ、楽しみ甲斐がないからね。」

もうちょっと逃げ回つてもらわないと」

静かな森の中、雪を踏みしめる足音と、彼女を嘲弄する声が迫つて来る。屈辱と恐怖に奥歯が擦れ合つて鳴る。

「どこかな？」

「どこに隠れてるのさ？ 出でおいでよ。隠れてたんじや、面白くないだろ？」

敵が雪を踏む音が聞こえるなら、こちらの這う音も敵に聞こえるだろう。もう一步も動けなかつた。足が竦んで力が入らなかつた。

「虐めないから出ておいで」

「そうそう！ 手足を撃つていたぶつてから、その顔にめちゃくちや弾を撃ち込んであげるよ。あの時の坊やみたいにさ。くすくすくすくす！」

クルツカは悲鳴を上げたくなるのを懸命に堪えながら、喘ぐ息が敵に聞こえるのを防ぐために口を手で覆つた。

見つかりませんように、見つかりませんように――。

恐怖と寒さとで震えながら、雪の中に身を横たえてじつと堪えた。

* 雪の妖精は、何故銃を手にしたのか

クルツカ・サムライネンには自慢出来ることがいくつもあるが、その一つは長い白銀の髪だつた。磨いた銀器のように輝く髪をたなびかせ、スキーを履いて白い雪の中を駆け抜ける彼女の姿は、まるで雪の妖精だと無口な祖父が褒めたほどである。

彼女の祖父は猟師で、彼女をよく狩猟に連れて行つてくれた。

祖父は散弾銃を用いず、一発の銃弾で毛綿鴨を打ち落とす技量を持つていた。彼女は祖父の腕前をこのサーミ地方、いやスオミ共和国全域に広げても、右に並ぶ者はいないはずだと自慢に思つていた。毛綿鴨はその名が示すように、その羽毛に価値がある。商品価値を落とすことなく射落とすには、鴨の頭部を狙うしかない。飛んでいれば素早く、地にいれば右に左へとよく動き回る鴨の小さな頭部が的だ。それを臆病な鳥達が気づかないような遠方からの命中させるというのだから、どれほどの技術かが想像出来るだろう。

だが、彼女の祖父は言つた。

「儂を思い上がりせてはいかんぞクルツカ。この程度のこと、スオミの……ましてや儂らサーミの猟師ならば普通なんだ」

サーミの猟師とは、皆そのような男達なのかとクルツカは素直に驚いた。と同時に、祖父の謙虚

過ぎる態度をもどかしく感じていることを、唇を尖らすという方法で表した。

「お前はやつぱり雪の妖精じやな。冬の女王の眷属だ」

「冬の女王さま？」

「そうじゃ……冬の女王は、自信家や腕自慢が大好きなんじや。男を唆し煽り立てては無謀な挑戦へと驅り立てる。その妖しい魅力に唆された何人もの男が、女王の国へと招かれていった。お前の父親のようにな」

クルツカは、祖父の憤りにも似た感情がどうして自分に向けられているのか分からず狼狽^{うきょう}えた。それを見た祖父は優しい声色に立ち戻つてクルツカにわびる。

「幼いお前に言うようなことではなかつたな。済まん」

クルツカは幼かつたが、祖父がやるせない気持ちを抱えていることは感じ取れたので、傷ついたことを水に流してやることにした。

「ねえ、おじいちゃん。お父さんは女王さまのところにいるの？」

「ああ。きっと多分、いるじやろう。案外、妖精の住まう国で楽しくやつとるかもしけんな」苦笑する祖父の言葉にクルツカは「そ、うなんだ……」と肯いた。そして祖父と自分とを蝕む寂寥^{むしゃ}感を解決するための名案を披露した。

「ねえねえおじいちゃん。あたしに、てつぱうのうち方を教えて」

「何故こんなものをいじりたがる？ 女の子なら女の子らしく、人形でも強請^{ねだ}つていれば良かるう。

なんなら今度買つて来てやるぞ」

「ううん、人形なんていらないわ。それよりもてつぱうなのよ。てつぱうの名手になつて自慢していれば、冬の女王さまからお前こつちに来なさいって声がかかるんでしよう？ そうしたらお父さんに会わせてくださいってお願ひできるもの」

「そんな必要はない！ そんなのはお前の母親で充分だ！」

父親がいなくなるとほどなく姿を消した母親について、祖父はクルツカに「父親を探しに行つたんじやよ」と説明していた。

「あたしも行くわ。お父さんとお母さんを連れ戻して来るのよ」

「その必要はない。父さんのことは、母さんに任せておきなさい。あの女なら上手くやるじやろうて。殺したって死なないような女じやつたからな、心配など必要ない」

初めて聞いたとばかりにクルツカは碧い瞳を輝かせた。

「お母さんつてそんなにすごい人だったの？」

「ああ。お前の母親は、雪の女王そのものと思うような、しようわる……いやいやいや、女傑じやつたんじやよ」

クルツカの母親はサーミ人ではなかつたが、夫と組んで狩りに出るとサーミの獵師を喰らせるほどの腕前を示し、様々な獲物を仕留めて来たと祖父は語った。二人の手にかかると毛綿鴨は当然、籠鹿^{らじか}、トナカイなど実に様々な動物が獲物となつたという。

「腕が良過ぎて獲物を獲り過ぎてしまふくらいじやつたんじや」

「決めた。あたしもお母さんのようになる」

「いかん！ ああなたつては絶対に駄目じや！」

「どうしてよ!?」

寡黙な祖父は「まだ、お前には早い！」と鼻白むと、それ以上は母親がどんな人であったかを決して語ってくれなくなつてしまつたのである。だが、その代わりとばかりに銃を習いたいという希望については叶えてくれた。祖父の目が届く場所でしか銃を手にしない、サーミの神々にそう誓わせた上で銃の練習を許可してくれたのである。

血筋なのか、それとも良き指導者に恵まれたためか、クルツカはやがて銃の名手となつた。祖父と共に獵に出れば、鼈鹿や鴨を次々と仕留めた。

「おじいちゃんがサーミ地方で一番。あたしが二番だ！」

美しく成長したクルツカは、そう言って自慢するようになった。幼いあの時に心に決めたように、冬の女王からの迎えが来やすくなるよう、あえて周囲の腕自慢と競い合い、それに勝つて、誇る態度をとり続けたのである。もちろん周囲から少しばかり変わっている生意気な娘だと見なされてしまうことは承知の上であつた。他の女の子が、花や刺繡や恋の話に興じているのを傍目に、男の子に交ざつて獵や射撃の技を競つてゐるのだから、それは仕方のないことであろう。

だからすぐにこんな風に言われることとなつた。

「クルツカつて男の子みたい」

「威張りんばうよね」

他の女の子は、男子のような彼女を見て陰口をたたいた。そこには性の別が様々な形で表面化し始める年頃にあって、男という種族と対等に渡り合う彼女への反発と羨望の成分が含まれていた。さらにクルツカは、整った容姿と美しい髪を持つていたから余計に周囲からの嫉妬を招いたのだ。

幼い頃の決心は、大きくなつてもその思考や行動に深い影響を残す物である。クルツカは本当は纖細で傷つきやすい自分を隠して、勝ち気な性格を演じ抜き、ほんの少しばかりの理解者と大多数の敵対者に囲まれて育つていつたのである。

美しく成長したクルツカは、鏡を前にして自分の姿をじっと睨んでいた。

長い白銀の髪は、彼女の自慢だ。祖父に褒められ、親友から称えられたこの髪を、邪魔だと感じたのはこれが初めてだつた。髪を惜しむように梳りながら、鏡に映る自分の姿を睨みつけると、そこには十七歳となつた美少女がこちらを見つめていた。

自分で言うのもなんだが、どの角度から見ても綺麗である。切れ長の眉、長い睫^{まつげ}、二重の瞼、細くすつきりとしたおとがい、淡いピンクに染まる頬に、さくらんぼのような唇。

これならば、微笑み一つで男という種族を魅了することも可能なはずだ。今ならば、祖父が「雪の妖精、冬の女王の眷属」と自分に向けて言い放つた意味も理解出来る。それだけに男に化けよう

とするからには、せめて外見だけでも“らしく”する必要があるのだ。

五年ほど前から膨らみ始め、綺麗な曲線を描いて隆起した胸は、二裂包帯をぎゅっと堅く巻きつけて押さえ込む。ウエストの細さや腰回りのなめらかさは厚着をすれば何とか誤魔化せるだろう。だがこの髪だけは、長いままではダメなのだ。

かつて祖父と共に獲物を追つて白海沿いに進んでいった時、風に乗つて聞くも恐ろしい悲鳴と、苦悶の叫びがクルツカの耳に流れ込んできがあった。

少女は寒さとは別の理由で身を震わせながら、尋ねた。

「お、おじいちゃん、あれは何？ あそこは地獄なの？」

クルツカが指を差した白海の方角には、ニューヴオスト連邦ノーヴィヤ・オストの政府が作った灰色の建物が見えた。

クルツカの耳に聞こえるこの叫びはそこから聞こえて来るようであった。

クルツカが、その身に宿る才能を示した瞬間である。

祖父はクルツカが、常人には見えないものを見、常人には聞こえないものを聞くノアイデ（靈媒師）の素質を備えていることに気づくと、しばしの間瞠目していた。だが、その才が孫娘に最初にもたらしたもののがこのようなものであつたことにがつかりしたのか、詰まらなさそうに鼻を鳴らした。

「ヴェナヤの奴らが言うには、あそこは働く者の楽園だそうだ」

「だつたらどうしてあんな苦しそうな悲鳴が聞こえて来るの？」

「クルツカ、よく覚えておきなさい。言うこととやつていることが全く逆の人間がこの世にはいるのだ。幸せをあげるなどと不可能な約束で夢を見させておき、実は苦しみしか与えない嘘つきがこの世には大勢いるのだ。そんな人間を見分ける智恵を身につけなさい」

クルツカは不安になつた。そのような智恵を持つことが自分に出来るのか、さっぱり自信がなかつたからだ。

「簡単だ。その手の連中は、大抵他人にしてはいけませんと言ひながら、自分だけはそれを行う。いろんな理由をつけてな。奴らはそういう嘘に長けていたのだ。だから言葉ではなく行いを見れば自ずとわかつてくる」

「それって、あたしに蜂蜜をなめてはいけませんって言つておいて、自分だけ隠れてなめてたお婆さまみたいな人のこと？」

これには祖父も困つたような表情をした。クルツカの言い様を認めると、大抵の大人がそれに当てはまつてしまうのだ。

「……まあ、なんだ、その中でも程度の酷いものだと思いなさい。婆さんぐらいなら、まあなんだ、普通の範囲だ」

「わかつたわ。でも、どうして神様はそんな人間をお作りになつたのかしら」「奴らを作つたのは神ではない。多分悪魔だろう」

以来、クルツカは国境の向こう側には悪魔の国があると信じた。

もちろん、成長した今はクルツカも国境の向こうがおどき話に出てくるような悪魔の国だとは思っていない。だが、そこから聞こえた悲鳴や苦悶の声はクルツカの耳に残っていた。つまりは、国境の向こうにあるのは地獄ではなく、人々を苦しめることを平気でやる人間が統べる国であると、その恐ろしさを再認識したのである。

祖父はいつも言っていた。

「儂はお前がノアイデとしての才があることを示した時、もっと別なところに連れて行くべきであつたと後悔しているよ。お前にはもっと素晴らしいものを感じ、もっと素晴らしいものを観て欲しかつたからな。だがお前は最初に恐怖を感じ取つてしまつた。その感情はお前の生涯を縛るものになつてしまふだろう」

そして、その危惧は現実のものとなつた。その隣国が、このスオミを呑み込もうとし始めた時、クルツカは恐怖でいたたまれなくなつた。だから彼女は戦うことを決めたのである。

男に化けなくとも戦えると彼女の親友は言つていた。実際、兵士達が着る防寒用のセーラーを編み、負傷兵の治療のために包帯を織り、工場に行つて兵器を作る手伝いをするロツタ・スヴァアルト（女性国防支援員）として、伝令や兵站任務に就く道もある。防空用の聴音手が不足していると言つて、カンテレを奏でることに秀で、絶対音感を有する友人はこれに志願していつた。

確かに、戦いのために役立つことは、全てが戦いだ。だが、クルツカは直接銃を手にとつて戦ひたかつた。何よりも彼女の特技は射撃だったからである。

彼女の腕前は、二百メートル先の毛綿鴨を一発で仕留めることができるように上がつていた。祖父亡き今、サーミでの一番はクルツカだ。そして、サーミで一番ということは、このスオミで一番ということでもある。ならばその自分は戦場で戦う義務がある。

セーターを編むことも、包帯を巻くことも上手に出来ない以上、彼女に出来ることはその銃の技量で傍若無人な『ヴェナヤ兵共』に、誰に喧嘩を売つたか教えてやることだけ。そして、連中を国境の向こう側へと追い返すのだ。

「髪は、また伸ばせるのよね」

クルツカは意を決し、鏡台に置いた鏡^{はさみ}に手を伸ばした。

じより……という感触と音が、彼女の魂に深く、深く刻み込まれた。

切り落とされた髪の束を見るのが、悔しくもあり、同時に誇らしくもあつた。

*
*

「クルツカ・サームライネン。十七歳で間違いないな」

クルツカは出来るだけ声が低くなるよう、女と気づかれまいとしてお腹に力を入れて「はい、クルツカ・サムライネン、十七歳で間違ひありません」と答えた。

スオミ共和国の徴兵年齢は十七歳だ。兵役期間は三百五十日間。そして徴兵期間終了後も六十歳までは予備役として有事に備えるとされていた。

襟元がすうすうして妙に寒々しいので襟を立てる。刈り上げたうなじのラインは、自分のひいき目であつても、独特の色氣があるわよねえと思つたりした。

クルツカは身を乗り出すと書類を指さして訂正を要求した。

「けれど姓は、サムライネンです。アーネ（a）は一つだけ……」
四代前の祖先が名前の綴り間違いを強引に押し通して以来のこの姓である。いろいろなところで何度も繰り返した訂正なので手慣れたものだつた。

事務官は「ああ？」と眉を寄せながらも文字を訂正した。

「よし。これを持って隣に行け」

募兵事務所の担当官は、ちらりとクルツカの姿を一瞥しただけで簡単に書類を手渡した。この瞬間に、クルツカはスオミ共和国国防軍の最下級兵士ソタミエスとなつたのだ。

思つてはいた以上に簡単だつたので拍子抜けである。やつたことと言えば出生証明書の性別と姓名の欄をちよこちよこつと削つて名前を男っぽく書き換えただけ。実に簡単な作業だつた。顔見知りばつかりのサーミ地方ではなく、首都に近いラドガ・カレリア管区募兵事務所を選んだのも幸いした。なぜサーミ人が志願したのかと問われた時のためにいろいろと言ひ訳を考えていたのだが、その必要もなかつた。もつともこの募兵事務所を見渡せば、詳しい質問をされなかつた理由も明らか

だ。そこは男達を国中から搔き集めたような大混雑の中にあつたからだ。

「制服とかはどこで受け取るんですか？」

クルツカは事務官に尋ねた。だが、男はクルツカを見ることもなく、忙しそうに書類を書き込みながら言つた。

「今はみんなに行き渡るほどないんだ。次の者！」

クルツカは、亡くなつた祖父の服を引っ張り出して着ていた。

猶に出るにはそれで十分だつたかも知れないが、戦うからには軍の制服を着たい。というより制服を着ないと、自分が兵士になつた、兵士になれたのだという実感が湧かないのだ。

事務所は、集まつた男達の吐く息で、噎せ返るほどに混み合つてゐる。そんな中でクルツカは人の流れに抗い、これだけは聞かねばという感じで叫んだ。

「あの、じや、このまんまの格好で部隊に配属されるのかしら……いや、ですか？」

「馬鹿、お前達訓練未了の奴をいきなり戦場に出すわけないだろう。まず基礎訓練をしてからだ。とりあえず国防軍の徽章キシヤウが配られるから見える場所につけておけ。必要な物はおいおい行き渡るはずだ」

こうしてクルツカは必要最低限の訓練を受けるために、貨物列車に乗り込むこととなつたのである。

団地なり、住宅なり、隣近所との付き合いほど面倒臭いものはない。

常識を弁えた良き人が隣人ならば、平和に穏やかな日々を送ることも出来るだろう。だが偏屈であつたり、被害妄想の虚言癖の持ち主であつたり、はたまた傍迷惑な行為を繰り返すような者が隣人となつたら、最早悲劇としか言いようがない。穏やかな暮らしは望むべくもなくなる。もしそのような者が隣人となつたら、引っ越しを考えるしかない。引っ越しした先に似たような性格を持つ者がいないことを祈りながら。

だが、国家となるとそういうわけにはいかない。

引っ越しにも、世界の地図に空白の土地はなく、誰にも迷惑をかけずに移り住める場所など、既にどこにもないからだ。それでも移り住もうとするのなら、元から住んでいた住民をどこかに追いやつて無理矢理に住み着くしかなく、そこに正義はない。無理矢理に正義を仕立て上げても、信じてくれるるのは身内ばかり。四方を敵に囲まれて永遠に心安らぐ時は来ないだろう。

つまりは自らが『困ったちやん』になってしまうのだ。

そんな厚顔無恥なこと出来ないと思う常識人ならば、例え隣人が『困ったちやん』であろうとも、忍耐して暮らさなければならないのである。「ああ、どつか遠くに引っ越ししたい」と歎息しながら。

そして今、悲願の独立を達成したばかりの年若い小国が、傍若無人な隣国の迷惑行為に頭を悩ませていた。

革命を成し遂げ、独裁的な支配体制の下で安定を取り戻した超大国が、革命の論理と価値観を楯にして、内乱の間に失つたかつての版図(はんと)を取り戻そうと、その本性をむき出しにして来たのだ。

その要求を分かりやすく例えると、以下のようになる。

曰く、「厳重に戸締まりするのは、俺が泥棒だと決めつけているみたいで不愉快だからやめる。窓や扉に錠を下ろすな。錠は取り外せ！」

曰く、「壁越しの部屋の物音が気になるから、玄関と壁に面する部屋を俺に寄こせ！ 代わりに北風は吹き込むが見晴らしの良いバルコニーをくれてやる。どうだ、気前のいい話だろう？」

はつきり言って暴論である。ヤクザか強盗の論理としか言いようがない。今日の常識に照らし合わせれば、このような要求は通るはずがない。だが、当時の世界を支配していたのは弱肉強食の掟であり、強者の言い分を弱者は呑むしかなかつた。でなければ、殺されて……いや、滅ぼされてしまうのだ。

現代の社会に警察があり裁判所があるように、当時のこの世界にも国際連盟という仲違いを仲裁する機関があつた。だが、それらを支配するのは結局のところ、力の論理であり、小国がいくら声を束ねて抗議しても、腕力のある大国がそれを無視してしまえば、何の力にもならなかつたのである。乱暴な隣人は、手を変え品を変えて脅迫を繰り返す。平和的な交渉の姿を借りながら、恥知らず

にもコートの下に機関銃をちらつかせていた。近所を見渡せば、同様の脅しを受けた隣人がどんどん住処や自由を奪われつつあつた。

例えはヴィロ共和国、例えはプオラ共和国。

もし、玄関に面する部屋をくれてやり、住むにも住めないバルコニーを受け取れば、とりあえず争いを避けることは出来るだろう。当面は。そう、当面の間は。しかし一旦譲ってしまえば、次は居間を寄こせ、トイレを寄こせ、台所を寄こせと言われる。そして住む空間を狭められながらついには今夜の食事から、掃除の仕方、喋る言葉まで、すべてにおいて隣人の意志に従うことを要求されることになるのだ。

そんな生活、誰が我慢出来る？

小国の住人はそんなこと我慢出来ないと考えた。だから、要求を拒絶することを選んだ。そして、誰も助けてくれない中で必死になつて戦うことを決めた。そして自分は他の連中とは違う。例え敗北の運命が待ち構えているとしても、我々を相手に恥知らずで非常識な要求を押し通すには高い代償が必要だという常識を、隣人に教育する道を選んだのである。

小国の名は、オスミ共和国。独立間もない人口三百二十万人の、それほどたいした産業もない森と湖の小さな小さな国である。

そんな国が全国民をあげて、戦うための物資を国中から搔き集め、人口のほぼ一割にあたる三十万の兵士で国境の守りを固めようとしていた。

大国の名は、ニューヴオスト連邦。^{リーグト}一般的にはヴェナヤと呼ばれることが多い。人口二億を超える超大国だ。百五十万人の赤軍兵と、莫大な量の戦車と大砲を国境近くに集結させ、物資を高々と積み上げていく。指導者ジュガシヴィリが帽子を振るだけで、堰を切つたように西に向かつて全てを呑み尽くすだろう。誰もがそう思った。

「進み過ぎて、オスミの西側に位置するルオツィ王国まで行くなよ」という冗談が、赤軍内で飛び交つたぐらいである。

「オスミみたいな小国が、ヴェナヤを相手にして勝てるわけがない」

「可哀想に」

まだ、始まつてもない戦いの結末を予想した連盟諸国は、同情を寄せニューヴオスト連邦^{リーグト}に対する抗議の声を上げた。だが、それはオスミにとつては何の救いにもならなかつた。オスミには味方の存在が、命を賭して一緒に戦つてくれる者の登場こそが必要だつたのだ。だが、負けるに決まつている戦いに手を出し、自分まで火傷する馬鹿はいない。

世界の何処を探しても、他人の代わりに血を流してくれる正義の味方はない。自分が大切と思うものは、自らの手で自らの力で守らなければ守れない。それが現実なのである。

オスミの首都を始めとする主要都市が、ヴェナヤ軍の空爆を受けた。オスミ共和国の代表は国際連盟の議場でヴェナヤの行為を批難した。だが、ヴェナヤの外務大臣スクリャービンは開き直つた。

「我々は、オスミの反動政治家と資本家の圧政に抑圧されているオスミの民衆を救うために、パンを送り届けているに過ぎない」

事もあるうに建物を破壊し、人々に死の惨劇をもたらす爆弾の投下を、パンの投下であると弁明したのである。

以来人々は、ヴェナヤの爆撃機を『スクリヤービンのパン籠』^{パンかご}と揶揄した。そしてヴェナヤ人という存在が、理性を捨て去つた野獸であることを思い知ったのである。

時は一九三九年十一月二十六日、十五時四十五分。

ヴェナヤ政府は、オスミ砲兵がマイニラ村のヴェナヤ軍陣地に向けて砲撃を行つたと一方的に言い立てて中立条約を破棄。そしてそれを理由に同月三十日に宣戦布告。国境からヴェナヤ百万の将兵が雪崩を打つように進撃を始めた。

後に『冬戦争』と呼ばれる奇跡の戦いが幕を開けたのである。

† 第三十四歩兵連隊第二大隊第六中隊と、パン屋の親父

一九三九年十二月四日（月）^{マーナンタイ}

一昨日から降り始めた雪で大地は白く染まつていた。

重苦しい灰色の空の下、クルツカ達の乗つた貨物列車は重い金属のぶつかり合う音を立てながらロイモラ駅で停車した。貨車の扉が開かれて、新兵達が雪に覆われた大地にわらわらと降り立つ。ここから東へは貨物列車は進めない。既に戦場となつた地域では装甲列車が敵と戦つている。その行動を阻害するような貨物列車は邪魔なだけなのだ。

そのためクルツカ達はスキーを履いた。補給物資を載せた橇^{アキオ}を皆で牽引しながら、セーターと真新しい偽装服を着込んだ新兵達は、強い風に逆らつてスオ湖に向かう国道を十キロほど東へと進む。標高百八十二メートルのコッラーの丘を上り切ると、その麓^{ふもと}に広がる南北に細長い湖が見えてくる。「コッラー湖だ！」

クルツカ達新兵は極東の島国から送られて来た竹製のストックを雪に突き刺し、スキーを止める。とその美しい景色をしばしの間眺めた。

オスミは森と湖の国だ。二万を優に超える湖が国土のあちこちに散りばめられていて、とりわけ珍しいものではない。だが、丘の頂上から見下ろされる光景は、彼らにもどこか格別に感じられた。

オスミ——特にラドガ湖北地域の地図を見ると面白いことに気がつく。

どの川もどの湖も、全体としては概ね南北に細長い形を持つているのだ。まるで立てかけたガラスに霧吹き水をかけ、水をよく絞らない雑巾で一方方向に拭いたような感じで、概ね同じ方向へと流れているのである。

コッラー湖もその例にならつて南北に長く、その南端からは雪に閉ざされた森の中を蛇行する川

を南東に向けて延ばしていた。そして河口付近には、国道が東西に横切るための橋が架けられ、その南約一キロのところには鉄道のための鉄橋が架けられている。

大軍が西に向かつて進むには、この国道を用いるか鉄道を利用するしかない。そのためヴェナヤ軍はここを必ず通過する。オスミ軍はそれを阻止するために、コツラ川に架けられた国道の橋と鉄道の鉄橋の西側を半包囲する形で、防御陣地を構築したのである。

それは三列の有刺鉄線と、乱石による対戦車バリケード、さらに二十メートルおいて対戦車壕あるいは傾斜壁を掘り、またさらに二十メートルほどのところに二列からなる有刺鉄線。そしてその先にオスミ軍の防御陣地が待ち構えるという重層的なものであつた。

オスミ軍陣地に到着したクルッカ達補充兵が赴くようにと命じられたのは、第三十四歩兵連隊ハルトマン少佐率いる第二大隊であつた。

クルッカがその中の第六中隊に配属されたのは、ただの偶然である。整列した先頭から順番に、お前は第四中隊、次は第五中隊に行け……という感じで振り分けられ、彼女が六番目だったに過ぎない。

十一月三十日の開戦と同時にオスミとの国境を突破したヴェナヤ軍は、既に二十キロほど進んできている。ラドガ・カレリア方面に進出してきた敵は、その第八軍。司令官はイヴァン・ハバロフである。彼は、麾下にある部隊を三つに分けて以下のように展開させた。第一百六十八、第十八の二個狙撃兵師団はラドガ湖北岸を西進。第七十五、第百三十九の二個狙撃兵師団はオス湖の北を周つ

てトルヴァ湖方面に。そしてヒルシラ村を焼き払った後にスヴィラフディに入つた第五十六狙撃兵師団を、このコツラー地方へ向けた。

オスミ軍第三十四連隊第二大隊第六中隊の兵士達は、開戦以来、直接の戦闘は避けつつ、敵の進撃地域のインフラを破壊しながら後退する停滞作戦に従事していた。そして昨日の内にこのコツラーの防衛線に到着して、ここに踏み留まつて戦う準備を始めたのである。そのためオスミ陣地は、塹壕や、障害の増強作業のため、白い雪を被う大地のあちこちにつるはしとスコップが突き立てられていた。

指揮官が兵達にがなり立てている。

「とりあえず対戦車砲は正面に一門。北側に二門、南側に一門だ！ 固定して使うなんて余裕は我が軍はないぞ。適宜移動させながら使うから掩体だけ掩えておくんだ！ 空っぽなのは寂しいから丸太でも置いて大砲に偽装させておけ！ 遠目で対戦車砲に見えるようにな！」

「機関銃は？」

「同じだ。敵の動きに応じて移動させられるように何力所も銃座を掩えておくんだ！」

その様子を眺めながらクルッカは首を傾げた。

「もう、すぐそこまで敵が来てるっていうのに、まだこんな作業をしているの!?」

そもそも当初の計画では、オス湖地区に踏み留まつて敵を防ぐはずであつた。だが準備の遅れのため、コツラーまで下がつて敵を迎撃こととなつてしまつたのだ。

この地域に用意された陣地も元々は、最初の防衛線で防ぎきれなかつた時に一旦下がつて敵を止めする遅滞戦術用のものだ。敵の初撃を防ぐための設備としては充分とは言えない。兵士が寝起きするための宿舎すら作られてないのだ。

クルツカのぼやきに仲間の新兵が答えた。

「準備はいくらやつてもやり過ぎつことはないよ？ 軫壕だつてもつと深くしなきや」

「それはそうだけど、準備が悪過ぎない？ ヴエナヤが攻めて来るのは分かつてたのに」

「分かつてはいたよ。だけど、ぎりぎりまで交渉で解決出来るつて思つてたんだ」

「呆れた。ルッシャなんて生き物がそれほど理性的なわけないじやない。無差別に投下される『パン』のせいで何人死んだと思つてるの!?」

兵士達が作業をしている間を、新兵達はそんなことを言い合いながら縋うようにして歩き、作業の監督をしている下士官や将校達に「中隊長はどちらですか？」と尋ねてまわつた。

あつちだ。いや、あそこだ、と赴く度に違う方向を指さされ、いいかげん疲れてきた頃になつて、ようやく指揮官の居所を見つけることが出来た。「申告します。セッポ・サボライネン以下十名。ただいま着任いたしました」

彼女達の前に立つた中隊長は、身長約百九十七センチの厳つい顔つきをした男だつた。

その男は「諸君の着任を認める」と敬礼を返してから、「俺様がアーレネ・エドヴァルド・ユーティライネン予備役中尉である」と自己紹介をした。

自分の中隊長が予備役と知つたクルツカは「本職の軍人じゃないんだ」とがつかりしていた。どうせ指揮されるならやはり職業軍人としての訓練を受け、軍人として現役で働いていた人間の方が良いという思いがあつたからだ。予備役という言葉にはどうにもパートタイマー的な響きがある。教師をしていて了予備役の指揮官、郵便配達をしていて了予備役の下士官。こうした者を馬鹿にするつもりはないが、スオミ最強の銃手たる自分を指揮するには相応しくないような気がする。この自らを「俺様」呼ばわりするユーティライネン予備役中尉からは、パン屋の親父的な雑な印象を受けた。
豪放磊落な気性と言えば聞こえは良いが、きっと弟子の職人達を前に竈がどうの生地の練り具合がどうのと講釈を垂れながら、カチカチの硬いパンを焼くのだ。

パンならばそれでも良いのかも知れないけれど、戦争はそういう風にはいかないと思う。

とは言え兵士となつたからには好き嫌いを言える立場ではない。この「俺様」指揮官の下で彼女は戦わなくてはならないのだ。クルツカはユーティライネン中隊長のひととなりを出来るだけ早く把握して、どうしたら自分の実力を認めさせることが出来るかを考えることにした。その方が、愚痴をこぼしているよりは遙かに建設的だろうから。

ユーティライネン中隊長は、小隊長を呼び集めると補充兵達をそれぞれの指揮下に配分していく。そしてクルツカと、もう一人の年若い兵士——おそらくクルツカと似た方法で年齢を誤魔化したものである——セッポ少年とを「従卒」に任命すると言つ出した。

「従卒って何？」

クルツカが小声で尋ねると、隣の少年は「そんなこと、僕に分かるわけないじゃないか!」と口答えした。そんな会話が聞こえたのか、ユーティライネン中隊長は言つた。

「従卒っていうのは俺様の、要するになんだ……つまりは雑用係だ」

「はあ?」

「従卒って何? と思つたクルツカは生返事で頷いた。だが、少年の方は即座に理解したらしく強く感情的な反発をした。

「そんな、雑用係だなんて!」

「おいおい、気に入らないのか? 従卒も立派な仕事だぞ。俺様が余計なことをしないで済むようにお前達が雑用をこなす。力ハザイを入れたり、俺様のシャツを畳んだりするんだ。するとだな、俺様はこの冴えた頭脳を、敵をやつづける方法を考えることだけに使える。しかも今日まで従卒をやつてた熟練兵は戦闘にまわつてもらえる。どうだ、なかなかに大切な役割だと思わないか?」

「でも、僕は戦いたくてここに来たんです」

ユーティライネンは頬を指先でポリと搔いた。

「そりやまあ、そうでなきやこんな所には来んだろうな」

「中隊長、僕に戦闘任務を下さい!」

「だがなあ、促成栽培のお前達に、敵と味方を間違えずに銃を撃つなんて高度なことが出来るのか? 俺様はそいつがとても不安で夜も眠れなくなつちまいそうだぞ。頼むから味方の後ろ頭を撃つたり

するなよ。コメデイじやないんだから、何しやがるって突っ込み入れて済むこっちゃないんだからな!」

「出来ますよ!」

セツボは胸を張つて答へ、クルツカも慌てて肯いた。

「そうか、そこまで言うなら試してやろう。お前達、あの目標に弾を当てることも出来るよな?」

ユーティライネン中隊長は、陣地の百メートルほど前方に広がる白樺の林を指さした。

「目標つて、どれですか?」

「どれでもいい。あの白樺の枝をだな、ここからその銃で撃ち落として見せろ。それが出来たらまあ、配置を考えてやらんでもない」

ユーティライネン中隊長は銃を撃てるかとは尋ねなかつた。

オスミの男に銃を扱えるかと問うことは、極東の島国に住まう民に箸を使えるかと問うようなものだからだ。出来るのが当たり前。従つて、要求された技量は、百メートル先にある木の枝を弾丸で射落とせというものだつた。

流石に難しいと少年は息を呑む。百メートル先の立木で、肉眼で確認出来る枝など太いものばかりだ。そんな枝は、例え弾丸を命中させることが出来ても、落とすことは出来ない。

だが、クルツカは答えるよりも早く、伏せ撃ちの姿勢をとつた。
手袋を外すと、モシン・ナガンのコピーであるM二八／三〇小銃を構え、適切な的を選ぶ。

するとあたりで作業していた兵士達が手を止めた。

まさかユーティライネンの無理難題に挑戦しようとする新兵がいるとは思わなかつたのだ。最初は無謀な挑戦だと揶揄する気持ちで眺めていた彼らだが、作業の音が消えて周囲には重い静けさが満ちていく。空気が張り詰め、兵士達の背筋に冷氣を浴びせられたような緊張が走つた。

クルツカは軽く引き金に指をかけると、ペロリと唇を舐めた。そして引き金を絞つていき——照準が合つた瞬間に引く。

モシン・ナガンと、M二八／三〇の決定的な違いはその命中精度だろう。本家本元よりも民間防衛隊銃器製造株式会社（S A K O）製の方が造りが丁寧なのだ。そのうえに彼女に回ってきた銃は出来が良い部類に入るため、狙つた場所に弾が行つてくれ集弾率も良い。

瞬く間の早業で一発の弾丸が消費され、百メートル先の白樺から、降り積もつた雪とともに枝が一本落ちる。

兵士達は一斉にどよめいた。

再び立ち上がつたクルツカは、流れるような動作で槓桿こうかんを引いて排莢はいきょうすると、そのまま直立不動の姿勢をとつて「撃ちました」と復命した。

「ほうほうほう、なかなか凄い腕前だな。何処で誰に射撃を学んだ?」

ユーティライネン中隊長は、嬉しそうに破顔した。

「祖父からです。祖父はサーミ一番の獵師でした。今はあたしが一番です」

だからこんなことは朝飯前だ。スオミの男ならばこの一言で全てが理解出来るでしよう?

クルツカは、そんな意思を込めて言った。

中隊長はクルツカの顔つきや体躯をまじまじと見ると「おい、新兵」と呼びつけた。

「お前の名前は?」

「クルツク・サムライネンであります。中隊長殿!」

「女みたいに綺麗な顔立ちをしてやがるな。お前が男なのが惜しいくらいだぞ。恋人は故郷にいるか? お前が死んだら、涙で集落が洪水になつちまうくらいに、泣く娘が大勢いるんじゃないだろうな? 羨ましがるだけで怒らんから正直に言つてみろ! どうだ、んー!?」

「そんなのいません。祖父も死にました」

「ふむ、そうか。ならばお前を従卒にするのはやめてやろう。腕自慢のお前にちようどいいところがある。ついてこい……」

ユーティライネンは、クルツカに命令した。

「ちゅ、中隊長殿。僕は!」

セツポ少年が呼びかける。その声には、僕を置いてきぼりにしないでという響きがあつた。

「兵卒サボライネン。あそこの枝を一発で射落として見せろ。出来なきやお前は俺の従卒だ」

ユーティライネン中隊長はそう命令すると、クルツカだけを引き連れて構築中の陣地から離れたのである。

丘の斜面を歩くことしばし。ユーティライネン中隊長は、陣地から少しばかり離れた場所で、丸木小屋を建設している兵隊達に声をかけた。普通の建物と違つて、地面に半分めり込んだ形になっている。

「おい、カルフ！ カルフ上曹はいるか？」

弾かれるように飛び出してきたのは上級軍曹の階級章を付けていた男だつた。のこぎりをほつぱり出して直立不動の姿勢で中隊長の前に立つ。

「はいっ、中隊長殿！ 御用ですか？」

「新進気鋭の補充兵を連れてきてやつたぞ。お前のところで使え。レトネン少尉には俺様から話しておいてやる」

「はいっ！」

雪に身体半分埋もれてスコップを振つていた兵隊達は、その声に手を止めて顔を上げた。中隊長が直々に連れてきた新兵に興味があるのだろう。「みんなよく聞け。この新兵はなかなかの腕自慢だぞ。本人に言わせると、サーミで一番なんだそうだ」

「つまりはスオミで一番つてことです」

クルツカの補足説明に、兵隊達は驚いた表情をした。そしてすぐに嘲るように笑つた。

何がおかしい？

古参兵達の反応にむかつ腹の立つたクルツカだつたが、怒鳴り返すのはやめておいた。クルツカがその腕前を誇ると男達が鼻で笑うのは、今に始まつたことではないからだ。

こうした連中を黙らせるには、結果をもつて知らしめて行くしかない。これまでの彼女は自分を馬鹿にする連中を実力で黙らせて來た。これからもそうするだけである。

すると兵隊達もクルツカの態度に感じるところがあつたのか、すぐに笑うのを止めた。小生意気なガキが身のほど知らずに腕を自慢していると思ったのだが、嘲笑しても感情的になつて怒り出さないところから、壯語を支えるだけの実力の持ち主であることを察する。張り子と違う本当の実力を持つ者は、他人に言葉で貶されたくらいでは、何とも思わないものなのだ。

すると中隊長は説明を付け加えた。

「お前達、聞いて驚け。この新兵はな、百メートル先の白樺の枝を初弾の一発で落として見せたぞ」「おおっ！」

「俺様がこいつをここに連れてきたのは、そういう理由だ……そして兵卒クルツク・サムライネン。

お前もここで鼻つ柱をへし折られて自信を喪失するなよ」

「どういうことですか？」

「この本部小隊にはな、それぞれの小隊に配属させるには惜しい実力者ばかりを揃えてあるんだ。例えだな……あの男を見る」

中隊長は、話に加わろうともせす黙々と塹壕を深く掘る作業に従事している小男を指さした。

クルツカは面白いではなかつたが、その兵隊の容姿をお世辞にも端正とか、いい男と評することは出来なかつた。女性として熟れてくれば「味わいのある顔だわ」と思う時が来るかも知れない。だが、まだまだ小娘でしかないクルツカにとつて、男性の評価基準はどうしたつて分かりやすい『美しさ』になつてしまふ。その意味で身長百六十センチに満たない男の容姿は、クルツカ好みからは大きく外れていたのだ。

「あいつの名前は、シモ・ヘイヘ予備役兵長だ。これまでにも数多の射撃大会に出場し、トロフィーを獲得してきた。この連隊、いやおそらくは第四軍随一の射手だ」

中隊長の贅辞が耳に入つたのか、その兵隊は不快そうに眉を寄せた。

年齢は三十ぐらいか？ 階級章は兵長のものをつけているからそれなりに軍隊生活が長いのだろうが、いくら相手がパートタイマーの予備役中尉だからって、上官から褒められたのに不機嫌さをあからさまにしてしまうような態度は、クルツカの美意識に反していた。

「おい、シムナ。若い奴に負けるなよ。こいつは慣れて来るとそれなりに腕前を發揮するぞ」

「俺を抜かすべしの腕自慢なら、きっと楽させてもらえるでしょう。助かります」

そうとだけ答えて土木作業に戻つてしまふ小男の態度は実に素つ気ないものであつた。

「相変わらず無口で謙虚な奴だ。謙虚過ぎるのが欠点とも言える」

ユーティライネン中隊長は、その他にも貴重な対戦車ライフルを担当するヤッコ兵長など、特別

な技能を有する男達をクルツカに紹介していくた。そしてクルツカを見下ろして「ふむ」と肩を竦める。

「俺様は威勢のいい奴が好きだ。もし前が女だつたら嫁にしたいぐらいだ。だがそれも実力を伴つていたらの話だ。お前は他の奴にはなかなか出来ないことをやつて、俺様を感心させてくれたが、もうすぐ始まる実戦は立木の枝を落とすのとは訳が違う。何しろ立木は撃ち返してこないんだからな」

「はい」

「まずは生き残ることに専念しろ。お前がその目の良さを生かすのは、その後だ。いいな」

ユーティライネンはそう言い聞かせてクルツカの小さな肩を叩いた。

些細なやり取りであつたが、クルツカは中隊長の評価を「案外人を見る目あるじやん」と思つくり上げていた。クルツカの目の良さを正しく評価出来る男が並であるはずがないからだ。

「カルフ上曹。任せたぞ」

カルフ上曹は「分かりました」と右腕を上げて敬礼した。

「よし、決まつた」

ユーティライネンはそう言うと、クルツカを振り返る。

「と言つてお前は、俺様直属のこの本部小隊で戦え。メシの食ひ方から糞のひり出し方まで上曹にひつついて教えてもらうんだぞ。いいな」

言いたいことを言つて颯爽と立ち去つていくその背中は、見るからに上機嫌そうであつた。

褒められたような気分になつて氣を良くしてい立クルツカも、快活な氣質の指揮官の下で働くのも悪くないように感じ始めていた。要するに単純な娘なのだ。

さあ、仕事だ。いや任務だ。クルツカは指令を貰おうと振り返る。

だが見れば、兵隊達はスコップで穴を掘る作業に戻つていた。クルツカなどいないかのようないで一心不乱に作業をしている。敵が近づいて来ていることがわかつてゐるから、寸刻の余裕もないのだろう。誰も彼もが必死で働いているのだと感じられた。とは言え自分は何をすればいい？

「あの……上曹？」自分は何をしたらいいんですか？」

するとカルフ上曹はクルツカに、ブリキのバケツを差し出して告げた。

「まずは俺達の飯を貰つてこい」

「信じられない！」上曹つたら、あたしに雑用しかさせてくれないのよ……じゃなくて、くれないんだぜ！ 要するに雑用係つてことよ！」

食糧を受け取るために補給係のテントに向かつたクルツカは、雑用を仰せつかつて走り回つているセツポを見つけるといきなり愚痴つた。

だがセツポ少年はそんな悩みは贊沢だと切つて捨てる。

「みんなピリピリしちやつて、僕達新兵どころじやないんだよ。いちいち指図してもららうなんて無

理だよ。仕事を見つけて自分からどんどん動かなきや」

「それは分かるけど」

「だいたい、クルツカは贊沢だよ。敵が来れば戦えるんだから。僕なんか、これじゃあボーリスカウトの時と全然変わらないよ！」

オスミの国防はボランティアである民間防衛隊によつて支えられている。民間防衛隊には徴兵年齢である十七歳に達していない少年が属する組織もあるのだが、そこではもっぱら兵站へいたん伝令といつた支援任務に就く。だがそれでは物足りないのか、年齢をこまかして兵役に志願する者もいて、セツポ少年もまたそんな者の一人のようであつた。

セツポは背負つていた銃を手にすると嘆息した。そして銃に降り積もつた雪に眉をひそめ、槓桿を握つてボルトを銃から引き抜くと、降り積もつた雪を払うべく「ふうつ、ふうつ」と息を吹きかけた。

「僕もクルツカみたいにこいつの腕前をもうちょっと磨いておけば良かつたよなあ」

セツポ少年はサヴォンリンナ市の商家の育ちで、銃を手にする機会が農村育ちの少年よりも少なかつたと言う。クルツカも同情したが、こればかりはすぐにどうこう出来ることでもない。射撃はコツさえ得れば大抵の者はある程度まで腕を上げることが出来るが、そのコツを得るまで気の遠くなるほどの練習を必要とするのだ。

「今からでも遅くないから、練習はしておきなさいよ」

「わかつたよ。けどなんかむかつく。クルツクの『ぶりはまるで母さんみたいだ』

母親の愛情を疎ましく思い始める年頃の少年は、クルツカに恨めしそうな視線を向けた。クルツカが自分に向ける視線が、母親が自分に向けるものとどこか似ていることをかぎ取つたのだろう。

「僕はもう子供じゃないんだ！」

「あんたねえ、そんなだから一言言いたくなるつて分かつてる？」

だがセツボは聞こえないとばかりに耳元で手を振ると、中隊長室に逃げるよう而去つて行つてしまつた。

「つたく。だからガキだつて言うの」

「ふん。お前も似たようなもんだろう？」

振り返ると炊事場の奥から恰幅の良い食糧係下級軍曹がやつてきた。

「はい。あたしもまだまだです。だから色々、至らないところは教えて下さい」

「なるほど。謙虚だな」

「大人の中で鼻つ柱を折られながら育ちましたから」

獵師の大達に交ざつて小さいうちから働いていると、嫌でも大人という存在の凄さと頼り甲斐を実感し、自分がいかに至らないかを理解するようになる。クルツカの腕自慢がすれすれのあたりで増上慢にならずに済んだのは、そんな環境にあつて、射撃以外の分野で優れていたり、経験を積んだりした者に対して敬意を払うこと身につけていたからであろう。

だからこそ、周囲に敵ばかりつくつたクルツカにも、友達と呼べる存在がいたのである。スヴィ、アニッタ、エーロ……クルツカの親友は皆、何かに秀でていて子供社会の中でも有力な存在だつた。クルツカの愛用しているミトンの手袋も、縫い物に長けたスヴィが作つて贈つてくれたものだ。内張りにはクルツカが狩つてきた獲物の皮が使つてあり、表面には雪の結晶が刺繡されたかなり凝つた代物だ。しかもミトンのくせに、右手の人差し指だけは独立させてある。微妙な引き金操作の邪魔にならないよう、射撃時に人差し指の先を露出させられるようになつてゐる。

食糧係軍曹はクルツカの前に「こいつを持つて行け」とバケツや箱を置いた。

バケツには茹でた黒ソーセージムスター・ツツカラが山盛りになつてゐる。それに缶詰と石みたいに硬いクラッカーが食事であつた。クルツカは小山のよくな食糧を落とさないように、ふらふらとした足取りで作業現場に戻つた。だがどうしたことか、そこにはカルフ上曹どころか本部小隊員達の姿までもなかつた。

「あれ？」

みんな用足しにでも出かけたかな？

周囲を何度も見渡して、誰もいないことを確認する。

チャンス！

バケツを弾薬箱の上に置くと、クルツカは荷物を抱えて構築途中の掩蔽壕えんぺいごうに潜り込んだ。

暗がりに身を隠し、あたりに注意を払いながら上衣を脱いでいく。そして下着のさらに下に巻き付けていた包帯を解いていった。

若い娘のつるんとした素肌が冷たい風に晒されてたちまち鳥肌が立つ。だがクルツカは寒さに震えるよりも、久々の解放感に首肩の凝りを解きほぐしてホッとため息をついた。

「いい加減、取り替えたかったのよね」

男所帯の中にいると独りになる機会はなかなか巡つてこない。基礎訓練を受けるようになつてから、クルツカはわずかな隙を突いて清潔を維持する習慣を身につけていた。

身体をぬぐつて、新しい包帯を胸に巻いていく。

すると突如として「そこにいるのは誰だ！」という声が投げかけられてクルツカは悲鳴を上げた。「きやああっ！」

振り返ればそこに訝しげな顔つきをしたヘイヘ兵長が立っていた。

「み、見た!?」

クルツカの刺すような視線に、ヘイヘ兵長はまるで関心がないかのごとく返した。

「いつまでサボってる新兵？ 作業はもう始まつてるぞ」

どうやら間一髪で見られずに済んだらしい。暗がりにいたのが幸いしたのか知らない。クルツカは安堵のため息をつくと慌てて上衣の襟のボタンを留めて返事した。

「あ、はい」

大急ぎで服装を点検して外へと飛び出す。すると小隊の皆はどこから現れたのか再び作業をしていた。どうやら切り倒した大木を運んでいたようで、今はその樹皮をむしっている。

これを掘った塹壕の上に並べて土を盛り、対砲爆撃用の掩蔽壕(えんぺいごう)にしようとしているのだ。

監督しているカルフ上曹にクルツカは食事を貰つてきたと報告した。

「おおつ、よし！ 野郎共、飯だ。交代で食え！」

カルフ上曹は、兵士達に食事を取るように指示した。

数名の兵士が湯気を上げている黒ソーセージをむさぼる。

その間に、クルツカは雪に刺しつ放しにされていたスコップを手に取ると、塹壕を広げる作業をすることにした。

スコップをまだ柔らかい雪に突き立てて掘り下げていくとやがて土の層に達する。たちまち腕が重くなつて、疲れが腰や足にまで広がつていつた。だがこれで音を上げては何のために戦場に出てきたのか分からなくなつてしまふ。頑張つて硬い土を割り、重い土砂をぐいっと持ち上げ、ぽいつと放り捨てる。するとそこで声をかけられた。

振り返ると、カルフ上曹が不機嫌そうな表情で立つていた。

「何をしている？」

「な、何つて、塹壕の構築作業をしています」

叱責の気配を感じて思わずたじろぐクルツカ。

カルフ上曹が白い雪の上に放り出された黒い土を一つずつ摘んで拾い始めると、クルツカはようやく上曹が何を言いたいのかが理解出来た。

「あ！」

周囲は樹も大地も悉くが雪の白色に被われている。だがその表面に投げ出された土によって、クルツカが掘つたあたりだけが酷く目立つていたのである。

クルツカは言い訳のように釈明した。

「上曹。そんなことしなくても降つてくる雪に覆われて、すぐに分からなくなりますよ」

こうしている今も雪はどんどん降り積もつていてるのだ。油断すれば頭や肩にまで積もつてしまうほどである。ちょっとぐらい雪を汚しても、すぐに見えなくなってしまうはずであつた。だがカルフ上曹は不機嫌そうな表情のまま、雪から土の粒を取り除きながら、声を押し殺すようにして言つた。「戦争はもう始まっているんだぞ新兵。敵が今、この瞬間に来たらどうする？」

そう言わると言い訳のしようがない。今、この瞬間に敵の攻撃を受けたとしたら、黒い土で目立つこの塹壕は集中的に狙われることになるのだ。

「……」

「よく考えろ。塹壕が敵から見えないように工夫しろ。命に関わるんだからな」

『獲物がどう動こうとしているのかを、よく考えて工夫しなさい』

上曹の言葉が尊敬する祖父の教えに微妙に重なつた。そんなこともあってか、クルツカも言い返したりせず「はあい」と答えて掘開作業に戻つた。

「でも、土はどこに棄てたらいいんですか？」

「基礎訓練課程で習わなかつたのか？ 掘開した土は塹壕の敵側に積み上げ平らに均し、その上から雪を被せておくんだ」

「そうだつた。雪で隠せばいいんだつた」

クルツカは、じ忘れしてましたとばかりにぺろつと舌を出すと、スコップの尖端を大地に突き刺した。

* 死闘の始まり。「撃つ」ということ

ニューヴオスト連邦^{リバート}、すなわちヴェナヤ軍の第五十六狙撃兵師団の先鋒部隊がコツラーラー川の東岸に到達したのは、十二月七日（木）^{トリスタイ}のことである。

ヴェナヤ軍の先遣部隊は、戦車を先頭に押し立て歩兵部隊が続くという形で、国道を西に進みコツラーラー川に架かつた橋を渡つた。

「敵が来た！ 敵がついに来た！」

前哨陣地からの電話が警告の声をがなり立てるのと、猛烈な砲撃と空襲がスオミの防衛陣地を襲つたのとはほぼ同時である。

空気を切り裂く砲弾の落下音が兵士達の神経を削り、腹の底に響く爆音が地面を揺する。森の木々